

2024年/9月学習会の案内 第67回「資本論を読む会」

9月30日（月曜日）午後6時30分—Zoomで開催

「第24章 第6節 産業資本家の生成、第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向」

[岩波文庫(三)p395-p417]。



8月29日の「読む会」は直前の26日に「その後のピケティ」勉強会があったこともあり、参加者は9名と少なめ(?)でした。

前回までは資本主義の本源的蓄積として、農業革命などを通じた労働

者の創出を見てきましたが、第3節の「血の立法」では、「暴力的な土地収奪によって放逐された人々、無保護なプロレタリアート」がすぐに工場労働者として吸収されるわけではなく、「生活軌道から投げ出された人々は、群れをなして、乞食となり、盗賊となり、浮浪人となった」。かくして彼ら浮浪者(労働者)に対する「15世紀末からの血の立法」は苛烈で、老齢で労働能力のない乞食には乞食鑑札。強健な浮浪人には鞭打ちと拘禁。再犯では耳が半分切り取られ、累犯三回目「公共の敵」として死刑に。逃亡者には額か背にS字の烙印、奴隷として賃貸し…等々と、ひどいものだったようです。

少し議論となったのは第4節の「資本家は最初はどこから来たのか?」(p384)。この下りでは「富裕な資本家借地農業者」という表現があります(p386)。借地農業者は最初は彼自身が「農奴だった」と書かれています。農業革命の進展が「農民の貧困を増すと同じ早さで、借地農業者の富を増す」。一と、彼が「最初の資本家」であるかのようなのですが、マルクスは断定的な表現ではなく「少しも不思議ではない」と、ナンカか曖昧な言い方!!「これまでの勉強ではたしか…富裕化した大商人や貿易商ということになっていたように思うが…」。「日本の最初の資本家は農民からじゃないよね?!」とかいう議論になりました。

あと2回(9月と10月で資本論)第一巻が終わります。懇親会では、「その後どうするの?」ということが話題に。「3巻の利潤論をやりたい」「支局で別建ての読者会をやってもらったら?」とか意見が出ましたが、ご意見があればどうぞ提供してください。

次回の「資本論を読む会」は標記の第6節・第7節をやります。レポートはSugiさんです。よろしくお祈りしますね。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから-kai

・資本論 第一巻 資本の生産過程 第七編 資本の蓄積過程 第二十四章 いわゆる本源的蓄積

◆第三節 一五世紀末以来の被収奪者にたいする血の立法。労働賃金引き下げのための諸法律

・土地から追い出された農民は、都市へ流れ込み、浮浪者や盗賊、乞食になってしまう人が続出した。

王族や貴族たちは、彼らを取り締まり、強制的に労働させる「血の立法」を制定した。

・こうして土地を奪取され、追放され、浮浪者となった農民たちは、拷問によって賃労働制度に必要な訓練を施(ほどこ)され、労働力以外、売るものがない労働者となったのである。

◆第四節 資本家的借地農業者の生成

・農民の収奪は、直接には大土地所有者をつくり出す。

・賃金労働者の使用により、貨幣または現物で地代として地主に支払う本来の借地農業者が現れる。

・借地農業者は、彼の賃金労働者と彼の地主とを同時に犠牲として、富をなした。

・「大土地所有者」「借地農業者」「農業労働者」が存在した。

◆第五節 工業への農業革命の反作用。産業資本のための国内市場の形成

※農業と分離した大工業が国内市場を征服していく。

・農産物は農業資本家によって、販売される。⇒衣類やその他の原料などは、産業資本家から買うようになる。

⇒借地農業者が経営する農業と、産業資本家が経営するマニュファクチュアは相互に市場を見出す。

⇒農業から追い立てられた人は、労働者となり、借地農業者のもとで農業労働者となるか、

そこにできた紡績工場などで働くようになる。⇒この工場が、大規模な機械性工業へと発展する。